

2015 年度立命館大学校友会 東日本大震災復興支援事業 東北応援ツアー レポート
「現地を訪問して想うこと」

ツアー参加者氏名： 奥菌真理子

卒業年： 卒業学部： 1983年 経営学部卒

【参加コース】 B 宮城県コース

まず、今回の東北応援ツアーに参加させていただきましたこと、そしてこのような企画運営をしていただきました校友会の皆様、また受け入れていただきました宮城県校友会の諸先輩の皆様にご心より御礼申し上げます。

実際に現地を訪れて自分の目で見ていただき、また、ささ圭様の佐々木様御夫婦に被災当日から今日までのお話を勉強会でお聞きするとともに、思い出の詰まった閑上地区の跡地を、実際にご案内いただきながら、当日の状況をお聞きさせていただくという非常に貴重な体験をさせていただきましたことを、心より感謝申し上げます。

2011年3月11日震災当日、私は4月からの東京事務所赴任を控え事前調整に東京へ行く予定でしたが、受け入れ先の都合で急きょ18日に変更したところでした。

もし、その日に上京していれば、東京駅難民になっていたところでした。

4月に上京してからも余震がつづき、夜9時になると銀座や秋葉原駅はほとんど人通りもなく廃墟のようで、東京駅隣接のシャングリラホテルは一時閉鎖、ライトアップ、お花見なども自粛されおり、真っ暗な東京であったことを鮮明に覚えています。

また、震災直後から、京都から被災地への人材派遣中継地として、東京での震災復興支援イベント等の開催を通じ、この震災については身近な課題と捉え、取組んではいましたが、直接、現地での震災後のボランティアの参加することができず、忸怩たる思いもありました。

東京での2年間の赴任を終え、すっかり震災前と変わらない華やかな東京から京都にもどり、その後は現地の状況に触れる機会も逸していたところ、今回の応援ツアーを知り、現状を知りたくて参加させていただきました。

テレビでみる女川町の復興の様子と、実際にこの目で見た女川町の現状とのかい離。復興工事が進んでも、この町は本当に人が戻るのだろうか？高台に作られている新たな街が完成するまでに、まだどれほどの年月が必要なのだろうか？

閑上地区の悲惨な津波の経験をした人々が、辛いことを思い出す地に、数年後の復興の区画整理事業の後、もう一度戻ってこられるのだろうか？精神的なトラウマを抱えられているか方も多いという現実。それぞれの経済状況も異なる中で、時間の経過とともに以前のコミュニティは戻らないのではないのだろうか？

また、この大規模な公共事業は地域の経済の復興の原動力になっていることは事実ですが、

本当にこのような防波堤や、高台移転のために山を削ることは必要なのだろうか？もっと、機能集約したコンパクトシティ構想は検討されたのだろうか？被災された方への支援はどのようなものが必要だったのだろうか？現地を見ることで本当に色々なことを考えさせられました。

併せて、自分の目で被災した建物を見て、バスガイドの方、語り部の方から当時の状況を直接伺うことで、改めて、自然の脅威を再認識させられました。

これからも、この震災の教訓を絶対に風化させてはなりませんし、今後とも自分にできることは何かを考えながら、少しでも復興のお役に立てることを探っていきたいと思っています。

実際に現地を訪れて自分の目で見ることや、実際に体験した人から直接聞くということは個人ではなかなか困難な事ですし、是非このようなツアーを引き続き実施していただきたくお願い申し上げます。

また、ささ圭様をはじめとする、被災された校友の皆様の少しでも早い復興を心よりお祈り申し上げます。

本当に有意義なツアーに参加させていただきありがとうございました。